



三
月

パストラル尼崎

弥
生

No.129, 2023(R5)年2月25日

〔編集・発行〕

パストラル尼崎

尼崎市潮江1丁目10-2

Tel. 06-6493-0521

Fax. 06-6493-0301

発行責任者：峰田 康弘

◆三月の歳時記◆

『八百屋お七の日』



3月29日は「八百屋お七の日」だそうです。皆さまが思い浮かべる有名なシーンといえば、燃え盛る炎の中、髪を振り乱し一心不乱に半鐘を鳴らすお七の姿ではないでしょうか？ 1862年、火災でお寺へ避難した八百屋の娘、お七は、そこで出会った青年と恋仲になります。しかし家が再建された元場所での生活が始まったものの、彼への思いは募るばかり。そこで「火事になればまた会えるはず！」と考えたお七は自分の家に放火をしてしまう。しかし当時の日本で放火は大罪。捕えられたお七は市中引き回しの上、火あぶりにされてしまうという悲恋の物語。

そんな恋に狂ったお七の命日が3月29日だったことから、この日は「八百屋お七の日」になったようです。（ただ、このお話、後世の作家がかなり脚色したようですが・・・汗）歌舞伎や浄瑠璃で大人気となったこの演目の影響は、近年にも及びます。お七が丙午に生まれたことから、江戸時代には、「丙午の年には火災が多い」というウワサが広まり、そこから丙午に生まれた女性は気性が激しく夫が早死にするという迷信が伝わっていきます。

そのせいで丙午の女性は嫌われ、その年に女の子を生むことが避けられるようになりました。近年の丙午は、明治期と昭和期にあり、実際、1906年の丙午では、出生率が前年より約4%減少し、その年に生まれた女性がそれを理由に縁談を破談にされ、自殺した事もあったようです。戦後もこれを信じる人はまだ多く、1966年の出生率は前年に比べて25%も低下。新しい時代になっているのにも関わらず、明治時代より減少したのは当時の週刊誌の影響とも言われています。その見出しには「60年に1度の危険」「来年赤ちゃんを産むあなたに警告します」「丙午の赤ちゃんを産んだら大変」というショッキングな文句が紙面に踊っています。汗

八百屋お七に端を発し、自殺という悲劇や日本社会に大きな影響を与えた「丙午の呪い」。この根拠のない迷信は、秋篠宮紀子さまが1966年の丙午生まれだったことが知られるようになった辺りから、かなり減少したとも言われています。それにしてもこのような迷信を面白おかしく伝承していった日本人。愚かといえるかもしれませんが、さて、次の丙午は3年後。「呪い」は晴れて解けるのでしょうか？

いちご♥いちご♥いちご

絶大な人気を誇るいちご。実は私たちが食べている実は果実ではなく花托（かたく）が発達した花の一部なのだそうです。本当の果実は、胡麻のようなあの粒々だそうですよ。汗

さて最近、本当に甘くなったいちご。品種改良もさかに行われて、いまや糖度において「あまおう」はベスト10にも入っていないのだそう。以下が今年の糖度ベスト5のいちご達です。1位『深紅の美鈴』（千葉県）2位『夏瑞』（北海道）3位『かなみひめ』（静岡、滋賀、山形県）4位『さくらももいちご』（徳島県）5位『古都華』（奈良県）となっています。

1位の『深紅の美鈴』の糖度はなんと20度を超え、2位と一線を画しています。見た目は少し黒っぽく“黒いちご”ともよばれています。ちなみに『あまおう』の糖度は11度。けれど糖度の高いいちごはまだ栽培量が少なくなかなかスーパーでは見かける事はなさそうです。

急増する『墓じまい』

最近、「墓じまい」を検討する家が増えているようです。厚生労働省によるとここ10年で、墓じまいや改葬をした件数が1.5倍も増加しているのだとか。その理由は6割の人が「遠方のため」と答えています。他には「管理費がかかる」など時間と費用の問題は切実のようです。近年のお墓事情として、費用や管理面で負担の少ない『樹木葬』や『納骨堂』が大きく躍進。たとえば2018年に46%あった『一般墓』が2022年には、25%に大きく減少。ここでトップに躍り出たのが『樹木葬』。24%→41%と激増しています。お隣の韓国では半数が『樹木葬』を選択しているのだとか。順位を見てみましょう！1位『樹木葬』、2位『一般墓』、僅差で3位『納骨堂』の順です。『その他』はまだ少数ですが、『合祀、散骨、手元供養』などもあります。とはいえお墓に対する考え方は人それぞれですよ。たとえば『樹木葬』に向いている人は、・子どもに迷惑をかけたくない人・独身の人・自然に還るという意識の強い人・予算をかけたくない人・墓石や墓標にこだわりのない人・親族などが賛成している。などだそうです。

お墓の変遷は今に始まった事ではなく、色んなかたちを経て明治時代に今の形式になりました。案外最近ですよ。そう考えるといずれにせよ『形』はそんな重要なものでなく、一番は故人を想う『心』に行きつくような気がしています。

